刃に忍ばせる心の色

初代小人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気刃斬りは、使い手の気迫でモンスターを攻撃するもの
ならばそこには使い手の心が介在するだろう

という設定を練って集めて寄せた小説になります。
自己解釈、独自設定の塊のような小説になりますのでそれでもＯＫな方はよろしくお

願いします。

あとモンスターはあまり出てきません

目次

第壱部
プロローグ 1
壱ノ段 上 5
壱ノ段 下 12
弐ノ段 上 19
弐ノ段 中 24
弐ノ段 下 32
焔ノ段 紅 39
焔ノ段 碧 47
間章 53
第零章
感傷・壱 58
感傷・弐 64
感傷・参 71
感傷・肆 75
感傷・伍 79
感傷・陸 83
感傷・漆 89
感傷・捌 94
感傷・玖 99
感傷・拾 104
感傷・拾壱 109

第壱部
プロローグ

今でもなお夢に見る。
パチパチと燃える音に混じる剣戟の音。
振るわれる赤と青の刃。

吹き出した血潮。
覚悟のまま死んでいく男の顔。
その全てが俺にとって忘れようがなくて、脳裏から離れない。
嗚呼、吐き気がする。

パチリ、と目が覚めた。
外から聞こえる小鳥の囀(さえず)りに、慌ててテントから飛び出してまず目に入ってきたのは

俺の身長よりも長いだろうかというほどの太刀を背負った男だった。
眉間に不機嫌そうに深く皺を刻んだ顔は男の俺から見ても整っていて、濃紺の髪がカチューシャで後ろに流して留められている。
「遅いぞ、オーガ。俺たちが盗賊と戦っている間ずっとぐっすりとは、いいご身分だな」
「ごめんよアル！寝過ごした！というかまた盗賊が来たの!?」
「ああ。別に手こずるほどでもなかったがだからと言って寝てていい訳では無いだろう。だいたいお前には危機感というものが」
「とか言いつつちゃぁんとオーガの方に賊が行かないように目を光らせてたよねぇ～？いつもよくやるよねぇ～？」
「余計なことを言うなベタ。こいつもあと1年で成人するんだ、もう少ししっかりしてくれないとその内リオレウスの巣にでも置いて行くことになる。」
「そう言うならそろそろオーガに〝気刃斬り〟くらい教えてやればいいのにな！俺ァもう十分実力は足りてると思うぜ？」
今アルの説教を取りなしてくれたのがベタとガマ。
ベタは髪を短く刈り上げていて、いつも薄い茶色のレンズのサングラスを掛けている。
一応俺たちの中では最年長なのだが、掴みどころがなくて頼りにならないところがあ

るので、リーダーはアルがやっている。
黄色の擦り切れたヨレヨレのスーツにこれまた同じ色でヨレヨレの羽根帽子を身につけていて戦いづらそうだが本人は身軽で、ライトボウガンを自身が座る丸太の傍らに置いている。
ガマは一度行ったことのあるカムラの里のハンターのような姿で、額当てこそしていないが鎖帷子を身にまとった軽装で、背中に刃が四つに分かれた変わった形の双剣を背負っている。

「ン」
「ああ、今回の戦利品か。いつも助かる。ありがとうデル」
「ン」

そんな中アルに皮袋を差し出してきた大柄なスキンヘッド男が俺たちの猟団最後のメンバー、金庫守のデル。
無口で基本的に「ン」しか言わないが何故か会話が成立する。
ヨツミワドウの装備を一式身につけており、有事にはその体躯に見合った特注サイズのヘヴィボウガンで対処する。

そんな俺たちは「デコボコの猟団」として活動しているのだが、どうやらそう思っているのは俺たちだけのようで、周りからは〝鬼の猟団〟と呼ばれているらしい。

「で！今日こそ気刃斬り、教えてくれるよな!?アル！」
「寝坊助に教えることなんてない。素振りでもしてろ」
「この鬼ー!!!鬼の猟団の鬼教官!!!」
「普段の倍素振りするって聞こえたな。相当真面目とみえる」
「アルなんて嫌いだぁ!!!」
俺の絶叫と、皆の笑い声が血に濡れた平原に響いた。

壱ノ段　上

砂漠に掛け声が響く。

「９９４、９９５、９９６、９９７、９９８、９９９、１０００！」

「終わったか。次は斬り下がりだな。」

「アル、少しくらい、休ませてくれよ」

俺が鬼教官（アル）に息も絶え絶えでそう言うと「そんなものは気合で乗り切れ。太刀使いに最も必要なものは気迫だ。お前は大型モンスターに囲まれてる最中にでも疲れたら休憩するのか？」と、耳にタコができるほど言われた台詞が返ってきた。

「そろそろ〝気刃斬り〟を教えてやろうと思ったんだがお前にはまだ早かったか」

という言葉に飛び起き、修行を再開する。

「１、２、３、４、５……」

他のみんなの暖かい視線は……今だけ無視することにしよう。

見てるなら助けて欲しい、俺はそう思いながらいつも通りの素振りを続けるのであった。

「さて、今日の素振りは終わったようだな。」
「終わらせて、やったよ！」
「座れ、ここからは座学の時間だ。」
「なん……だと？」

「今日のテーマは〝気刃斬り〟について、だ。」
「は？」
「なんだ、不満か？」
聞き間違いかと思って思わず間抜けな声を出したらいつも通りの棘のある口調が返ってくる。

「いや、だってこれまで何回教えて欲しいって言っても教えてくれなかったからさ……」
「……3歳の頃から太刀を持ち上げて握らせ、それが容易になってからは一日千回の素振りを始めさせた。縦振りの素振り千回が容易になると太刀の基本的な斬り方をいく

つか教え、それぞれ千回ずつ素振りするよう言いつけた。
　これが日が高くなる前に出来るようになったら元々教えるつもりでいた。不満か？」
「いえ滅相もない！」

　不機嫌そうな声を慌てて否定する。
「なら続ける。
　ハンターの用いる太刀は太刀と言っても東方の国で使われている「カタナ」とは異なるということは教えたと思うが、何が違うか答えてみろ」
「えと、攻撃対象が人ではなくモンスターであるため、長大な刀身とそれに伴って柄も大きくなっている、だっけ？」
「それに加えて強力なもの程狩った死体から作られているためその魂、気迫が篭もるって所かねぇ～？」
「ベタ、修行の邪魔はするなと言ってあったはずだが？」
「ええ？水汲みなんてわっちがしなくても他のふたりで十分でしょうよぉ？」

　相も変わらず間延びした口調で適当なベタに、アルはため息をひとつ零す。
「砂漠での水は貴重だ。多いに越したことはない。オアシスがあるなら汲めるだけ汲ん

でこい、そう言ったはずだが？」
「へいへい、わっちは邪魔者だってことねぇ？それじゃあ師弟水入らずの修行に水を差すのも悪いしわっちは行ってくるねぇ？水汲みだけに水入らず、ふふっ……」
後半は何を言っていたか分からないがベタはそうして水汲みに行った。
アルはそんなベタの背中が見えなくなってからコホン、と咳払いをひとつ落としてから仕切り直した。

「続けるぞ。
モンスターはこの星において最も強大な存在と言ってもいい。故にその気迫は他の素材にない効果を及ぼす。
これは太刀に限らない。例えばガマが使う双剣は、武器に込められた気迫と使用者の気合を同調させることで鬼人化し、使用者の身体能力をスタミナを代償に引き上げる。」
「ああ、あの赤くなるやつか。」
「そうだ。」
とアルは首肯して話を続ける。
「太刀にも似たような物がある。それが〝気刃斬り〟と呼ばれる類の攻撃だ。これは武器の気迫に使用者の気合いを乗せることで発生し、様々な応用が出来る。」

「例えば？」
「例えば……そうだな」
そう言ってアルは自分の得物を鍔から先端にかけて藤紫から竜胆色にグラデーションが掛かった美しい鞘から抜いた。
「今この刀身には何も宿っていないが」
そう言って腰の鞘に刀を納めたすぐ後、地面が唐突に揺れ始め、俺は姿勢を保てず足元に手をついた。
アルはというと姿勢を変えず、目を細めて何かを狙っている。

その瞬間だった。
地面を割って二本の角が現れ、それと同時にアルが抜き手も見せず太刀を体を大きく横に半回転させながら振り抜く。
刀身がそれに呼応するように青い光の粒を振り撒き、攻撃を仕掛けてきた当の本人の角を一刀で断ち切る。
一連の動作が終わった時にはアルの手にある太刀の刀身には白い光がぼうっ、と宿っていた。
今回の下手人――――――ディアブロスは攻撃を仕掛けたはずが一瞬で攻防が入れ替

わったことに慄いたのか、はたまた自分の自慢の角が失われたことに動揺したのが少しの間地に落ちた自分の角を見下ろして困惑したように立っていた。

と、その時だった。

斬斬斬（ザザザン）という音を立ててディアブロスの頭から鮮血が噴き出した。

低い唸り声を上げたディアブロスは我に返ったように砂に潜った。

振動が遠ざかっていくことから逃げていったらしかった。

ふう、と息を吐いてアルが刀を納め、肩に背負う。

「今のが〝気刃斬り〟の極致のひとつ、〝居合抜刀気刃斬り〟だ。鞘に収めた刀に気を溜め、相手の攻撃に合わせて解き放つことで攻撃を受け流して、その勢いをそのまま返す技だ。更に太刀本体で切りつけたところに気の刃――――今後は気刃と呼ぶぞ――――を埋め込み、切りつけた数秒後に内側から炸裂させる技だ。

……何を惚けている？」

「すっげぇ……」

思わず漏れた声にアルは眉間に皺を寄せながら言葉を続けた。

「この程度に憧れるな。お前も当たり前のようにできるようになって貰うからな。

続けるぞ。〝気刃斬り〟にはいくつか種類があるが、共通点がひとつある。〝気刃斬

り〟を当てると刃に濃密な気迫が急速に乗ることになる。これには二段階あり、一段階めは先程見せた白い光を放つ状態であり、二段階目はさらに色が強くなり、黄色い光を放つようになる。

さて、ここまでで質問はあるか。」

その問いかけに俺は手を挙げて質問をした。

「〝気刃斬り〟を習得すれば、死んだ親父のような剣士になれるかな」

聞いた瞬間に、アルの顔がこわばり、眉間どころか顔全体に皺が寄る。

「いいか、死者はお前の前を歩かない。息子が父親を尊敬するのはいいが、間違っても憧れるな。」

突然吐き出されたアルらしからぬ感情の籠った言葉に、俺は何も返すことが出来なかった。

壱ノ段　下

少しの沈黙の後、アルが再び話し始めた。
「〝気刃斬り〟はそれその物が強力な攻撃である他に、武器の気迫と使用者の気合が混ざり、練り上げられた〝錬気〟が刀身に宿ることが特徴として挙げられる。先程俺が言った〝気刃斬り〟の後に刀身に光が宿ると言ったのも、錬気の余剰エネルギーが光となって放出される為に起きる現象だ。」
「で、錬気が刃に宿るとどうなるんだ?」
という質問するとアルは俺を一瞥してから
「間抜け面で聞いているのか心配だったが少しは聞いていたようで安心した。
逆に聞こう、どうなると思う?」
「え……なんか強くなる?」
「お前に期待した俺が馬鹿だったようだ。答えを見せてやるからこっちへ来い。」
そう言ってアルは近くにあったアルの身長よりも遥かに高い砂岩に向かって歩き出した。

俺も慌てて立ち上がり、アルの向かう方へと走り出す。

俺がアルの元に辿り着いたその時だった。

背中から刀を抜き、そして構えたかと思うと縦振り一閃。

流麗な動作で放たれた太刀筋は目の前の砂岩を真っ二つに切り裂いた。

切られた岩はそのまま崩れて、砂になっていく。

「……は？」

「〝錬気〟は気の刃だ。人は太刀を振るう時に目の前のものを断ち切ることに全力を込める。その気合いが、気迫がこうして刃に宿り、本来その刃では切れない物をこうして容易く切り裂く。

理論は全て教えた。あとはお前の気合を自分の得物に同調させることを体で覚えろ。これば かりは教えようがない。」

「コツとかもねぇのかよぉ！」

あまりに荒唐無稽な話に俺はつい声を上げた。

アルのことだからどうせ「気合」とか言うんだろうと思っていた。

しかし予想は覆された。

「お前はなんのためにその形見を振るうのか、次からは素振りの時にでも考えろ。」

そういったアルの顔は今までに見た事もないような険しい顔だった。

砂漠に剣戟の音が響きわたる。
相対する1人は小ぶりのカタナ、いわゆる忍者刀を構えており、もう1人は対照的に大ぶりな身の丈ほどもある太刀を振るっている。
その大きさに反してかなりの速度で振るわれる太刀を小さなカタナで次々弾いていく鎖帷子の男。
とはいえやはり手数では忍者刀の方が優るのか徐々に攻め手の数が逆転していき、太刀を持った男は武器を弾かれついに決定的な隙を晒してしまう。
首筋に添えられた忍者刀を見て男――――オーガは両手を上げた。

「ギブギブ、やっぱ太刀と小刀じゃ打ち合いになんねぇって」
「そうだな、本来は太刀の方が優位な筈なんだが、鍛え方が甘かったか?」
傍らで見ていたアルが口を出す。

「まあ俺もでこぼこの猟団の一員だしね、見習いにはまだまだ負けられねぇよ！」
「と言ってもオーガが入ってくる前はガマも見習いだったけどねぇ～？」
「それは言うなよ！俺は最高にかっこいい兄貴分で居たいんだよ！」
「それ、本人の前で言っちゃおしまいだと思うよォ～？」

そんなベタとガマの応酬をオーガは途中からあまり聞いていなかった。
ガマにも見習いの時代があった、その事実にオーガは驚きを隠せなかった。
「じゃ、じゃあガマもこの猟団で修行をしたのか……？」
口をついて出た質問に答えたのはガマ本人ではなくアルだった。
「いや、ガマはある程度鍛錬を積んでから入ったからな。お前が特殊な例なのもあるが俺たち教える事など殆どなかった。」
「そっか……」
「ところで休憩は済んだか？なら早くもう一本稽古をつけてやれ。」
「いや、もうちょっと休ませてくださいよ団長～、小刀で太刀を打ち返すのって案外疲れるんだぜ？」
「そうか、お前も見習いに戻りたいらしいな、ガマ。これらはオーガ共々鍛え直してやろ

う」
「いや！疲れてなんかないっす！ほらオーガも立って！早く始めるぞ!!」
「マジかよ……」
その日の修行は日が暮れるまで続いたという。

日中の疲れで体は重いのに一向に眠りに付けず、オーガは自分のテントから這い出た。
灼熱の砂漠も夜は冷え込む。
そのためと夜行性の小型モンスターを避ける意味合いもあって、でこぼこの猟団では交代制で火の番をすることとなっていた。
「おう、オーガ。眠れないのか？」
今日の火の番、ガマはそんなオーガに少し小声で声をかけた。

「うん、昼間にアルが言ってたこの親父の形見を振るう理由ってのがわかんなくてさ。ずっと考えちゃって寝付けないんだ。」
「そうか……」
「ねぇガマ。ガマはなんの為に戦うの？」
　そう質問したオーガだったが、珍しく返答が帰ってこないのでガマの顔を覗き込んだ。
　ガマは額を抑えて、考え込むような表情で少しの間考え込むと、その表情のままオーガを見つめてポツリ、ポツリと話し始めた。
「自分の信念を貫くため。自分の大事なものを守るため。自分の欲しいものを手に入れるため。武器を振るう理由なんて、人の数だけある。
　なあオーガ。アルは厳しいけどさ、きっと無駄なことはしないって俺は思うんだ。だから、アルが教えなかったのはその答えをきっとオーガ自身に見つけて欲しいからだと思うよ。」
「そっか……」
「って、柄にもなく真面目なこと言っちまったなぁ！大丈夫だって！オーガならやれるやれる！なんせ俺の弟分なんだから！」
　二度、三度ポンポンと叩かれた背中の温もりに、答えは出なかったけれど納得は出来

たような気がして、俺はガマにお礼を言って、テントに戻って眠りについた。

「戦う理由……かぁ……俺にも、誰にもわかんねぇよそんなの……」

頼れる兄貴分の頼りない独り言は砂漠の夜闇に溶けて呑まれていった。

弐ノ段　上

砂漠で〝気刃斬り〟について教わってから数ヶ月が経ったが、俺はまだ太刀に錬気を宿せずにいた。

「９９９、１０００！」

「終わったか。悪くないな」

「随分様になってきたんじゃないかねぇ～？最初なんて縦振りの素振りだけで日が暮れてたのにねぇ～？」

素振りを終わらせた俺に横で見ていたアルとベタがそれぞれ言う。

ベタの言うように素振り自体はだいぶん早く出来るようになった。

つい数ヶ月前まで悲鳴をあげていた素振り２倍を今やったとしても特に問題は無いだろうと直感的に思う。

しかし、足りない。

そんな表情を読み取ったのかガマが手合わせの支度をしながら声をかけてくる。

「〝気刃斬り〟が出来なくてもオーガは十分強くなってるぜ！ほら、手合わせしようぜ

?真剣勝負だけどな！つって」

ガマの冗談にも笑う気になれなかった。

今日こそは、今日こそはと太刀を振っては何も得られずに毎日がすぎていく。

「もういい。今日の鍛錬は終わりだ。その状態ではガマを付き合わせるだけ無駄だろう。」

アルの言葉に目の前が暗くなる。

見捨てられるのだろうか、漠然としていた不安が形を持ってのしかかる。

「どうしても何かをしていたいのなら……いいや、なんでもない。お前ら、狩りに行くぞ。この辺だと少し歩けばポポの群れが居るだろう。」

「了解」

キャンプ地には俺と、荷物守のデルだけが残された。

（1、2、3、4）

無我夢中で太刀を振るいながら顔も知らない親父に思いを馳せる。

俺は2歳の時ににアル達に引き取られたらしい。（物心が着いて覚えていないが。）
盗賊に襲われて壊滅した村の唯一の生き残りで、馬小屋の藁の中で泣きもせず放置されていたらしい。
その傍らには俺が今使っている親父の形見の刀と俺の身を案じる旨の手紙が置いてあったらしい。
アル達は村に救援に来て壊滅した村で俺を見つけて親代わりとして引き取り、育ててくれた。
アルはその話を聞いて復讐に駆られる俺に「親の仇が取りたければ強くなれ。」と発破をかけた。
それが今まで続いている修行の始まりだった。
アルは厳しかったが、確かに俺を強くしてくれた。
でも、これでは満足出来ない。
今でこそなりを潜めてはいるが、俺の故郷を滅ぼした復讐をしたいという気持ちは消えた訳では無い。
俺は、強くならなくてはならないのに……
その時、俺の頬にピタ、と触れるものがあった。

「ン」
「これは元気ドリンコ？」
「ン。少しは休め」
デルが珍しく言葉を発したことに俺は少し驚きながら礼を言った。
デルはそれを確かに聞いて、しかし明確な返答はせずに、独り言のように誰に対して言っているのかも分からない口調で珍しく呟いた。
「お前かどう感じてるか、どう思ってるか俺は知らない。でもアルはそのくらいでお前を捨てたりはしない。それで捨てるなら最初から引き受けない。」
一呼吸でそう言ったデルは、自分の持ち場である鍛冶場に向かっていった。
俺はそのなんとも言えない空気感に不思議と安堵を覚えたのだった。

「嵐が近づいている。出立の準備をしろ。
ベタは弾薬が湿気らないように包装しろ。ガマは再度天候確認を。デル、荷物をまとめて荷車に積み込め。
なんだオーガ、俺の顔になんか着いてるか？」
「いや、何も？俺は何をすればいい？」

「お前にしては珍しく気が利くじゃないか。いいだろう、デルの手伝いをしてやれ」

大きな波乱が音を立てて近づいてきていた……

弐ノ段　中

デルの操るアプトノスが牽く幌(ほろ)の付いた車の上で、アルがいつも通り険しい顔で後方を見つめている。

ガマは幌の上でより遠くの状況や風向きを確認して天候を読んでいる。

ベタはこんな時でもタバコをふかしていて紫煙が車内にたちこめている。

１０年以上この猟団で旅をしてきた中でこれ程の速度で走ったことがあっただろうか、と思うほどの速度に俺は焦燥感に駆られながらも何もすることが出来ず無力感に唇を噛む。

その時、アルが誰に言うでもないような口振りでこう言った。

「いつでも戦闘できるよう備えろ。最悪に意識を向けろ。」

そのような指示がされたこともまた初めてで、俺は慌てて肩に太刀を担いだ。

と、頭上からガマの声が何やら聞こえてきたと同時に、地面が揺れ始めた。

嵐に加えて地震まで起きたのかと思った時、ガマが車内に入ってきて言った。

揺れはどんどん強くなって地鳴りすら伴うようになり、やがて車を牽いていたアプト

ノスも走っていられなくなったようで、車は完全に停止した。

そしてガマが車内に入ってきて何か言おうと口を開いたまさにその時だった。

爆発音が響き、同時に衝撃波を伴った咆哮が轟いて、車は完全に横転して、動けなくなった。

車から飛び出していったアルとガマに続いて俺は出口から這い出した。

ベタは俺が這い出したすぐ横にいつの間にか立って、片手で愛銃である鬼ヶ島をこんな時でも気だるげに構えている。

「煙草が湿気っちまったねぇ～……この落とし前を取ってくれるのは君かい？」

言葉の通り煙を発さなくなったタバコを地面に吐き捨ててぐりぐりと踏みつけながら睨みつける先には、獰猛そうに鋭い牙が並んだ口を開けて威嚇し、その体躯を大きな翼脚で支える蒼と黄土色の絶対強者――――ティガレックスがいっそ冗談であって欲しかった程の威圧感を放って対峙していた。

そうしてガマが閃光弾を投げてティガレックスの動きを止めて言いかけていたことを今度こそ言葉にする。

「数え切れないほどの異種のモンスターが今来た方向から来る！これは百竜夜行だ！」

「百竜夜行か……」
「幸いあの轟竜が突出しているだけで百竜夜行本隊との接敵までには時間がある。ここは百竜夜行本隊と轟竜の対応、二手にわかれるのがいいかと思うがどうする、アル」
アルは一瞬考えた後に言った。
「俺とガマとデルで本隊の対処、オーガはティガレックスの討伐に当たれ！ベタ、悪いがオーガのサポートに当たってやってくれ、それでは」
そうして百竜夜行本隊へと向かおうとするアルを思わず遮る。
「待てよ！俺にアレの対処？討伐？冗談だろ？」
「いつまでお子様気分でいるつもりだ？俺に教えられることはもう全て教えた。あとはお前の気合しだいだ。
それでは各々、最良を尽くせ。散（サン）!!」

「さて、私らもお仕事の時間だねぇ～？ひとまず、これを使おうかねぇ～」
ベタがそう言って俺に銃口を向けて引き金を引く。
反射的に俺は回避行動をとりかけるが銃の方が早い。

しかし予想に反して銃口からは赤い霧のようなものが噴き出した。

ぞくり、とした感覚と共にじんわり力が湧いてくる。

初めての感覚に戸惑う俺にベタは「それは鬼人弾だねぇ～、鬼人薬を弾丸に込めて経皮吸収できるようにしたスグレモノ、って事になるかねぇ？さて、戦ろうかねぇ？」と、飄々とした口調の中に決意を滲ませていた。

そんなベタと裏腹に、やはり俺はまだ覚悟を決めることが出来なかった。

（俺が、こんな大きなモンスターと戦う？未熟者の、俺が？）

これまでにアル達が襲ってきたモンスターと戦っているのは何度も見てきた。

しかしいつも他のみんなが撃退、あるいは討伐してくれていたためどこか他人事のように感じていた。

〝気刃斬り〟も出来ない俺に、できるはずがない。

そんな考えが頭を過り体を固くする。

結果として閃光玉の目眩しから解き放たれたティガレックスが小手調べ程度にした翼脚すら回避できない。

（ほうら、ダメだった。）

そんなふうに投げやりに、アルの思い違いだったんだと半ば責任転嫁しながら最期のときを迎える覚悟をしたその時だった。
薄汚れた黄色い影が視界に飛び込んできて、俺を抱えてその場を離脱した。

「ベタ」
ありがとう、と続けようとしたその時だった。
「おうガキィ、いつまで惚(ほう)けてんだ。」
ベタの口から今まで聞いたことのないドスの効いた声が飛び出した。
「は?」
今日何度目かの俺の困惑にも動じずベタは上手く注意を自分に引き付けながらそのまま話を続ける。

「テメェはなんださっきから。この忙しい時に何様のつもりだ?
まだ見習いだから?未熟者だから?
戦場にンなもん関係ねェンだよ!!!
今全員でお互いを守る為に命懸けて戦ってんだろうが!」

その言葉どおり、ベタはティガレックスの猛攻を全て紙一重で避けていく。
翼脚に血管を浮かせて怒り狂うその視界にはもはや俺などという弱者は入っていないようでベタを執拗に狙っている。
それでもベタは声を上げることを止めない。

「いいかよく聞け！
この期に及んで命張れねぇようなやつは必要ねぇ！殿位はしてやるからさっさとこの場から消え失せろ！それかさっさとこのデカブツの胃袋の中に納まって永遠におねんねしてろ！
その刀はなぁ！俺が知る中で最も勇敢な男が握ってたモンなんだ！手前のような意気地無しが握っていいもんじゃねぇんだよ！」

「そんな事言ったって無理なものは」
「ンなこと聞いてねぇ!!」
あまりの言われように言い返そうとした言葉は聞くまでもなく切り捨てられた。
「手前も鬼の猟団の団員だろうが！いつまでも見習い気分で居るんじゃねぇ！腹ァ決め

やがれ！」

その言葉を聞いて俺は目が覚めたような気分だった。

いつからか俺は皆と自分を切り分けて考えていた。

みんなは強いからきっと大丈夫だなんてそんな訳もないのに心のどこかでそう思っていた。

そうだ、俺もこの猟団の一員なんだ。

ふぅ、と息を吐き出して目を瞑ってそれから見開く。

視界はもう、澄み切っている。

一歩。

肩に掛けた鞘から太刀を抜き。

二歩。

鞘を腰の位置へと移動させる。

三歩。

俺に発破を掛けた偉大な先達を突き飛ばして、矮小な人間を噛み砕いて飲み込まんとする顎（あぎと）の前で鞘に太刀を納める。

凶暴な顎(あぎと)がまさしく閉じられようとしたその刹那。
甲高い金属音を立てて人の身には余るほどの長大な刃が抜き放たれる。
同時に体を半回転させながら横に移動してティガレックスの顎(あぎと)から逃れる。
刃は正確にその凶悪な牙のない口角の部分を切り裂いた。

そして数瞬の後。
斬斬斬(ザザザン)という音を立ててティガレックスの頭から大量の血が噴き出す。
俺の右手に握られた太刀の刀身には、確かに白い光が宿っていた。

弐ノ段　下

「これが、〝気刃斬り〟……」
「腹は決まったようだねぇ～？」
「ああ。ありがとう、ベタ。」
「気にしなくていいよぉ～？それより、来るよォ～？」
「応！」
そう言って2人揃ってその場から飛び退いて怒り狂うティガレックスの噛みつきを回避する。
どうやら頭に当たったとはいえ〝居合抜刀気刃斬り〟だけではその強靭な体に致命傷を与えるには至らなかったようで、ティガレックスはむしろ自らを傷つけられたことでより強い怒りを孕んだ目でこちらを睨めつけている。
次いで突進を横飛びで回避して、止まったところに突きを入れる。
ティガレックスが右翼を振りかぶる。
俺はもう一度突きを繰り出して、伸びきったで太刀を引き戻す際にティガレックスの翼脚に動きを合わせて同時に体も引いて勢いを殺す。

そこから刀を構えなおして横一閃。そのまま前に縦斬り、即座に気合いを込めて刃を返す。

”錬気”が甲高い音を立てて刃に宿る。

先程までぼんやりと宿っていた刀身の白い光がより強く、確かなものになる。

振りぬいた太刀は確かにティガレックスの頭部を切り裂いた。

恐るべきはそのうえでまだ死にきれずにまだ起き上がろうと藻掻くティガレックスの生命力だろうか。

俺はゆっくりとティガレックスに近づく。

激闘の直後だというのに不思議と心は落ち着いていていっそ感謝すらある。

一刀、右上から左下に袈裟斬り。

二刀、先程と線対象になるように左上から右下へ斬撃を走らせる。

三刀、右から左へ一文字に切り裂く。

そうして溜めた錬気を縦に半円を描くように振り下ろして、それから反対に返した刃にすべて込める。

リィン！という高い音と共に三度〝気刃斬り〟が放たれ、刃を明るい黄色に染めた。
そして初めて俺が闘った好敵手であるティガレックスの巨体は、ついに大地に身を伏せ、動かなくなった。

大きく息を吐きだす。
後ろからパチパチと手拍子が響く。
「初狩猟、おめでとぅ～。自身はついたかい～？」
「あぁ。ありがとう、ベタさん。ベタさんがいなければ今頃やられてた。」
「いんやぁ～、わっちはちょこ～っと背中を押しただけさねぇ。それで決心して出した実力は間違いなくオーガ自身のものよぉ～。誇るといい。」
最後だけ一瞬俺に発破をかけた時の鋭い眼光を宿してベタはそう言った。
もちろん本心からの言葉なのだろうが、照れ隠しも多分に含まれているであろうそれに俺は場違いにも嬉しくなった。
「これから本当ならオーガの祝勝会と洒落こみたいところなんだけどねぇ～、どうにもそうもいきそうにないねぇ～。」
そう言いながらベタが銃口でひょいと指したところには百竜夜行に抗う三つの影があった。

三人ともかなり善戦してはいるのだが、多勢に無勢なのかじりじりと押し込まれて当初本隊があった所よりもかなり近いところで戦っており、その軌跡を描くように大型モンスターの死体や血痕などが残されている。
「さて、もうひと頑張り、出来そうかい～？」
「応！」
そう応えた彼はもう見習いなどではなく、鬼の猟団の一員としての確固たる自覚をもって駆け出した。

終わりの見えない戦いの中、確かに疲労がたまっていく。
空から襲い来るリオレウスの蹴りを半身交わして脚を両断する。
その刃には既に眩いほどに黄色い光を宿している。
ここで押し込まれるわけにはいかないという意地が気合いを生み、弟子にいつも言っている気合いの力を体現していた。
背後にはデルが重弩を構えて中遠距離のモンスターを迎撃して、アルのもとに迫るモ

ンスターの数をなるだけ減らしているが、弾薬も無限ではない。
使用している弾丸のレベルが徐々に下がっていっていることがそのことを如実に表していた。

ガマはというと空中を飛んでいるモンスターの上を器用に跳びはねては武器を振るって撃墜させ、動ける敵の数を減らしている。
しかし、如何せん数が多すぎる。
それに、〝赤〟は使うわけにはいかない。
その状況が冷静にしようと意識するアルの思考を徐々に鈍らせ、それに比例して体の動きも悪くなっていく。
このままではいけないとはわかっている。しかし後一手足りない、そんな状況で拮抗しつつあった百竜夜行本隊を、二つの黄色い閃光が切り裂いた。

「苦労してるみたいじゃんか師匠！助けてやるよ！」
「とりあえず鬼人弾を撃っておくとするかねぇ～」

「遅かったな。轟竜一匹ごときにずいぶん苦戦したと見える。

待ちに待った足りない〝一手〟の到来にアルはいつものように憎まれ口で応じた。

「言ってな！」

しかし彼はそれにすら全くひるむ様子もなくアルの後ろに立った。

男子三日会わざれば刮目して見よとはよく言ったもので何か一皮むけた様子のオーガはアルと同じ色の光を放つ刃を抜いて構えた。

（ティガレックスとの戦いで吹っ切れたか）

そう考えて静かに口角を上げる。

「要は全部倒せばいいんだろ？俺たちなら余裕だろ！」

「足を引っ張るなよ！」

そうして師弟が背中を合わせての攻防戦が始まる。

右、左、上、左、右。

〝気刃斬り〟について教えた日から今日にいたるまでアルの狩猟風景を見学してきたオーガにとって、アルの動きは頭の中で何度も、癖になるほどにイメージしてきたものであり、それに合わせて動くことは容易であった。

空を覆う色とりどりのモンスターの群れを斬って、撃って、斃（たお）したその先で、彼らは

嵐の曇天を見上げた。もはや見渡す限りの地面に血のないところは見当たらなかった。

最初に戦闘態勢を解いたのはガマだった。

遊撃隊として運動量も多く、鬼人化でより疲労を溜めていた彼こそ、最も消耗してもはや限界を超越していたのだった。

デル、ベタの両人はもはや使える弾薬を撃ち尽くし、これまでにないほどまでに熱されたバレルを冷やしている。

その様子を見てオーガは太刀を収めて座ろうとしたその時だった。

「伏せろ！」

鋭い指示が飛んだ。

しかし初戦闘、更に歴戦のハンターですら精魂尽きるほどの長丁場で疲労していたオーガの体は反応できない。

ドン、と鈍い音がして地面をひときわ鮮やかな赤が散った。

焔ノ段　紅

「は……？」

一瞬の出来事に掠れた声が漏れ出る。

視線の先には俺を庇ったアルが地面に倒れ伏している。

その原因となったモンスター、異常なまでに成長し、別物のような貫禄を以て〝鬼の猟団〟に相対するその火竜、ヌシ・リオレウスは、しかし狙った獲物を仕留め損ねたことを不満がるように口元に紅（あか）い炎を燻らせていた。

この火竜が、先程まで戦っていた百竜夜行を追い立てていたのだと本能的に理解させられ、オーガは身震いをした。

こんなの、勝てっこない。そんな心情を示すかのようにオーガの刃から色が失われていく。

その時、立ち上がる影がふたつあった。

「オーガ、逃げな。さっき言っただろ。殿(ケツ持ち)位はしてやる。お前さんをわっちら老いぼれの道連れにするには余りにしのびないからねぇ～？」
「ン！」
わざとらしく最後だけ不真面目に伸ばされた語尾は、心配するなというガマの気遣いで、それに応えたこれまでで1番のデルの声はきっとただの強がりで。
それは気炎万丈といった様子の2人ですら勝ち目が薄い――――いや、勝ち目がないことを示していて。

「嫌だよ！」
泣きそうな声を上げたオーガの頭にベタとガマが順番に手を置いて、不器用に撫でる。
「言ったろう、オーガ。甘えるな。甘ったれるな。全ての戦いに犠牲なく勝てるわけじゃない。俺達はそうやってこれまでやってきた。
それに頭領――――アルが居ればきっと〝鬼の猟団〟は終わらない。そうだろ、俺たちの希望の星。」
「でも、でも……」
このままではアルですら助けられない。

「ああ、そうだ。最期に一つだけ聞いておこうかねぇ～？オーガ、俺と、俺達と旅したこれまでは楽しかったかい～？」
　これまで２人と過ごしてきた時間が脳裏で走馬灯のように駆け巡ってもう言葉にもできず、首を縦に振ったオーガを見た２人はヌシ・リオレウスに向き直り、駆け出した。
「死に場所には悪くない、そうだろデル。」
「ン。」
　そんな会話をオーガは立ち尽くしながら聞くしかない。

　そんなオーガの肩に手を置いてふらふらとアルが立ち上がる。
　見れば腹に包帯を巻いて、手には空き瓶がある。
　その隣ではガマがアルに肩を貸している。

「対毒処置くらい自分で出来る。俺を見くびるなよ新入り」
「まあ、包帯は俺が巻いたんだけどな！」
　口振りとは裏腹に弱々しいアルが、ベタとデルに背を向けて歩き出そうとする。
　それと逆方向にベタとデルがヌシ・リオレウスを引き付けて、どんどん距離が離れていく。

「行くぞオーガ、引き際を間違えた俺達の負けだ」
「いや、だ」
「オーガ、アレは無理なんだよ、普段ならともかく今は俺もアルも動けない。俺だってこうやって歩くだけでもキツいんだ、ベタとデルの弾薬だってもう殆ど残ってないはずなんだ、グズグズしてたらあの二人の覚悟を無駄にすることになる！」
「それでも！」
「調子に乗るな！」
ガマに反駁したオーガを、更にアルが怒鳴りつける。
「轟竜とは訳が違う！お前が少し強くなろうが勝てる相手じゃないんだ！分かったら行くぞ！」
手を引いて歩き出そうとしたアルの手をオーガはそれでも振り払った。
「甘えるな、甘ったれるな。ベタは俺にそう言った。確かに俺はまだまだ甘いかもしれない。それでも今は、アルが2人に甘えてるように俺は思う！」
そう言って太刀を抜いて駆け出したオーガの後ろ姿を見て、アルは瞠目して呟いた。
「そっくりじゃないか……」

「ああ、そうだな。」
そう言葉を交わした2人の声はこれまでにないほど穏やかだった。

オーガが戦場に舞い戻った時、ヌシ・リオレウスは何かを咀嚼していた。
果たして何を、そう考えた時にヌシリオレウスの口元から所々が赤く染まった黄色い布が覗いて、ハッとして視線を向けたベタの左腕がないことに気づいてオーガはむせ返りそうになったのをすんでのところで堪えた。

ベタが険しい顔で痛みに耐えながらも戦いながら言う。
「何しに帰ってきたんだ、ここに手前（テメエ）がいても勝ち目はない、そう言わないと伝わらないほど阿呆だとは思わなかったが。」
「それでも、二人に甘えてはいられない。仲間というなら、猟団というなら、俺もここで死んでやる！」
そう言ったオーガに二人は思わず苦笑いをこぼした。
尤も気を休めている余裕はないのだが。

「それで、わっちらはもう揃って弾切れだが、勝算はあるのかねぇ～？」
「ない！でも大事なのは気合いだって、アルはいつも言ってた！」
２人はそれを聞いてしみじみと「アイツそっくりに育ったな……」と呟いていた。（デルはン、と相槌しただけだったが。）
そんな二人の前に立って、ヌシ・リオレウスに向き直る。

ヌシ・リオレウスは体に少しばかり傷がついてこそいるがその威容に衰えはない。
ヌシ・リオレウスは大した脅威でもない獲物が増えたことに舌なめずりをしている。
その次の瞬間ヌシ・リオレウスが咆哮を上げ、立ち竦んだオーガに後ろからピシャリ、と冷たい液体が浴びせられる。
「取っておきの鬼人硬化弾Ｌｖ２だよぉ～。硬化薬の効果も入っているだけに高価だからねぇ～？せめてもの助けになるといいんだけどねぇ～？」
ベタは不敵に笑い、デルはもはや何も言わずにサムズアップする。
そんな二人を見てオーガは鬼人硬化弾のおかげだけではなく、疲労困憊のはずの体に力が漲る。

「刃(ハ)ァァァァァァ！」と雄叫びを上げながら斬り降ろすオーガの刃をヌシ・リオレウスはその発達した爪で受け止める。

彼我の純粋なパワー比べの勝負はヌシ・リオレウスに軍配が上がり、押し返されたオーガは体制を崩す。

それを好機と見たヌシ・リオレウスは反動をつけて既に突き出していた双脚で蹴りを繰り出す。

しかしオーガもエンジンが掛かり直している。

すんでのところで刀を収め、鯉口を甲高く鳴らして〝居合抜刀気刃斬り〟を繰り出す。

斬斬斬(ザザザン)と３つの斬撃が走りヌシ・リオレウスの爪に浅くではあるが確かに傷が入り、オーガの刃にはその気概も味方して即座に黄色の光が確りと宿る。

これなら、とオーガは勝ちの目を見出す。

しかし、ヌシ・リオレウスもこれまでに幾度も死線をくぐった歴戦の強者。

力押しは有効だが接近戦は危険と見て距離を取り、大きく開いた顎(あぎと)から爆炎を吹き出した。

地面を沿って迫る爆発の紅(あか)い壁の前にオーガは為す術なくその体を地面に投げ出し

た。

焔ノ段　碧

黄色の刃を地面に突き立てて体を起こす。

乾きかけた血の粘り気のある嫌な感触を振り払ってヌシ・リオレウスを睨みつける。

まだ負けていないと言わんばかりの気迫に猟団の仲間たちですら固唾を飲んだ中でようやく戦場に追いついた男が、「アレは力押しでは絶対に勝てない。いいか、真正面から受けるな。わかったな」と言った。

名前も呼ばれていない師の教えに、弟子も武器を構え直して敵に向き直ることで返事とする。

極限まで研ぎ澄まされた感覚の中で刃を振るい、身を躱す。

「太刀は大剣のような破壊力はなく、片手剣や双剣ほどの手数もない。ランスほどの頑健さもない。

しかし太刀にはそれらには無い強みがある。それが靭(しな)やかさだ。」

「しなやかさ?」
「太刀は細く長く精巧に作られている分靭やかに曲がる。熟練の使い手ほどその靭やかさを活かして戦い、相手の攻撃を殺して身を守る堅さを持っているものだ。」

いつかの会話が脳裏に甦る。
靭やかに……攻撃の勢いを殺して……受け流す……
それだけを考えて無心で体を動かし続ける。

火球を受け流す。
背後で爆発が起きて地面を揺らす。
頭上から真っ直ぐ踏みつけてきた鉤爪を一歩下がって回避して切り上げる。
思わぬ反撃にヌシ・リオレウスは身を仰け反らせ、それから怒りを顕にして咆哮をあげる。
思わず耳を抑えたオーガに、ヌシ・リオレウスは容赦なく追撃を加える。
両脇をV字の炎に塞がれ、正面に鉤爪が迫る。

絶望的な状況に、目を瞑って太刀を縦に構える。

バシュン、と衝撃波が音を立ててなお、来るべき衝撃が訪れないことに目を開き、瞠目する。

――――何が起きたんだ……？

戸惑う俺を他所に刀身が透明な何かが渦を巻いて纏う。

黄色い光は消えているが、そこに錬気がある感触は確かにある。

まさか、刀身で弾いたのか？

双方が困惑しつつ再び相対し、ヌシ・リオレウスは様子見程度に火球をひとつ放った。

躱そうと思えば躱せる攻撃。

しかし俺は中段に構えて動かない。

そして切り上げ一閃。

パキィン！と甲高い音を立てて火球が割れて後ろに落ちる。

そして今まで渦巻いていた何かが猛烈な勢いで解き放たれ、俺を、いや親父の形見である神楽を中心に局所的な暴風となって吹き荒れる。

ヌシ・リオレウスも思わず体制を崩し、不時着じみた様子で地面に降り立つ。

断続的な嵐の中心。
そこには碧く輝く刃があった。

離れたところにいるはずのアルが息を呑む音が聞こえる。
それどころか周囲に吹き荒れている風の音までもがしっかりと聞こえ、、普段の数倍の情報量が耳から雪崩込む。
あまりの負荷に脳が軋む。

しかし意識は驚く程に明瞭で、何をすればいいのか、どうすべきかが手に取るようにわかる。
一歩、二歩と歩みを進める。
優勢なはずなのに何故か追い詰められるような感覚に陥ったヌシ・リオレウスが再び大地を離れ、立て続けに数発火球を吐くために羽ばたきのリズムを乱したのを聞き取って駆け出す。
左、右、とジグザグに回避し、正面に来たものは叩き斬る。
距離はどんどん縮んでいき、零となった瞬間飛び上がる。
反応しきれなかったヌシ・リオレウスの頭に張り付き、更に跳び上がって落下の勢い

も全て乗せて太刀を振り下ろす。
その傷口に植え付けられた錬気の刃が少し遅れて炸裂する。
斬斬斬斬斬（ザザザザザン）と、間隔が細すぎて数えられないほどの斬撃音が迸る。
ヌシ・リオレウスの躯（からだ）はその痛みに耐えきれず地に堕ちた。
そのまま立ち上がろうと藻掻（もが）くヌシ・リオレウスに静かに歩みよる。

この力、碧い刃が何なのか、俺には分からない。
でも、もしあり得るとしたら。俺はあの世の父を想った。

なあ、親父。見てるんだろ？
この太刀にはきっと親父の錬気が何度も篭められたんだよな。
だから、俺の大事な場所、大事な人達を守るために力を貸してくれたんだよな。
ありがとう親父。これからも、よろしく。

一刀、二刀と繰り出す気刃斬りに込める想いは感謝。
決して楽な闘いではなかった。
決して犠牲のない闘いでもなかった。

それでも、俺はこの闘いのおかげで成長できた。

甲高い金属音が、ヌシ・リオレウスの生涯を断ち切った。

ひとつ違えば真逆の結果が待っていてもおかしくない死闘だった。

空を覆っていた雲は晴れ、東の空から朝日が昇り、死が支配していた戦場を照らし出す。

嗚呼、疲れたなぁ……

オーガはゆっくりと意識を手放した。

間章

外から聞こえる海鳥の鳴き声にパチリ、と目を覚ます。
落ち着いて身支度を整えてテントの外に出ると相変わらず不機嫌そうに眉間に皺を寄せたアルの顔が視界に飛び込んでくる。
「新人どのは随分支度に時間を掛けるらしい。いいご身分だな。」
「そう言ってやるなよアル！今日は目出度い日なんだから！」
ガマが皮肉ったアルを取りなす。
「そうだよぉ～？ガマなんて丸一日寝てたこともあったんだしねぇ～？」
「それを言うなよォ！」
そこにベタが茶々を入れ、そんなやり取りの傍らでデルが座っている。
いつも通りの光景。
けれどあの一戦以来変わったものも確かにある。
ベタは隻腕の銃手となり、未だに戦いの際にはずっと見てきた俺達には分かる程度のぎこちなさが残っている。
本人は「腕1本分軽くなって調子いいくらいだねぇ～、それにオーガを守れたんだ、腕

の1本や2本くらい、悔いはないよぉ～」と嘯いていた。
けれど、しばらくの間毎晩のように痛みに呻き、魘されていたのを俺は決して忘れない。

「まあいい、それでは始めよう。」
そう言ったアルは、服の上からは見えないが胴体に大きな傷跡が残っている。
解毒薬と包帯で初期治療を速やかに行ったのが幸いしたのか後遺症は特になかった。
あの戦いが終わったあとで俺はアルに怪我のことを謝った。
アルは気にしていないとでも言うかのように手をヒラヒラとさせた。
赦しを得られたからこそ、俺はこの傷を一生背負って、反省の証として行こうと独りで誓った。

「鬼の猟団、もといデコボコの猟団の団員一同に問おう。この時点を持って見習い団員のオーガを正規団員とすることに賛同するものは拍手をもってその意志を示せ。」
アルの儀式めいた呼び掛けに3つ、いや4つの拍手がその場に鳴り響く。
「異論のあるものはいないようだな。これより団長の責務において、オーガを正規団員とする。」

「さて、悪いが認定証書などというものはこの団にはない。よって実利的な物を贈呈しよう。デル、例のものを。」

アルの合図に「ン」と答えながら黄色と赤と藍色が渦巻く炎のような太刀を献上するようにデルが差し出した。

あの戦い以来最も変化がなく、しかし最も大きく変化したのはデルだろう。

無口であまり表情を出さないところは変わらないが、稀に普通に話すようになったし時々嬉しそうに、或いは楽しそうにするようになった。

「先の百竜夜行並びに主火竜戦の武勲を称し、この太刀を正規団員認定の記念品として贈呈する。

銘を〝飛竜刀【轟焔】〟という。デルがお前のために打った一点物だ。これが使いこなせるようになるまでさらに精進するといい。」

あの日俺が斃した強敵二体の素材を使った逸品に胸が熱くなる。

「これは俺個人としての言葉になるのだが」

続けてアルが前置きをして云う。

「あの時、あの瞬間まで気刃斬りも出来なかったお前が、俺の背中を預けられるまでに強くなったことを、俺は誇りに思う。」

熱くなっていた胸の熱が、目頭にまでも伝播する。

ポツリ、ポツリと水滴が砂浜を濡らす。

俺は気刃斬りを習得した上、碧い気刃を手に入れた。

アルはこの碧い気刃の事を黄色の気刃を習得した上で、自分以外の誰か、あるいは何かのために戦う覚悟と勇気を持った剣士だけが使えるものだと言っていた。

「おい、オーガ、要らないのか?それなら俺が使いたいくらいの大業物なんだが。」

他のみんなが微笑ましそうに見ている中、バツが悪そうにアルが言う。

「要る!要るよ!ありがとうアル!ありがとう皆!」

「って言っても主役が泣いてちゃぁ～、締まりがないねぇ～」

「泣いてない!!!」

茶々を入れたベタに涙声で言い返した俺をみんなが笑う。

変わっていくけれど、変わらない景色が確かにここにある。

俺はこの光景が永遠に続けばいいのにと思った。

それほど暖かい空間だった。

アルから受け取った太刀を抜く。

チリリ、と火花を散らしてその刀身が顕になる。

親父の形見である【神楽】をベースに二体の飛竜の素材で強化されたそれは陽の光を

照り返して燦燦と輝き、ヌシ・リオレウスの焔が未だに宿っているかのように刀身には熱が籠っている。
錬気を込める。
刃が風を放って碧く輝く。
この空と海のような刃なら、この仲間たちとなら、どこまででも行ける。
そんな気がした。

第零章
感傷・壱

俺は正義のヒーローになりたかった。
男の子なら一度は抱くような幼稚な願望。
村のみんなを困らせる、怖がらせるモンスターは悪で、それをやっつけるハンターは正義。
二元化された幼稚な善悪論で、俺はハンターを目指した。

物心がついた頃には現役でハンターとして活躍していた父に師事して太刀を握っていた。
とはいえその年の俺は持ち上げるのも大変で、暫くの間は父がくれたお下がりの鉄刀を正しく握って持ち上げる事だけを練習していた。
縦振りの素振りが一日千回容易にこなせるようになったら基本的な太刀の振り方、斬り方を教わってそれをそれぞれ千回ずつ。

最初は不満もあったが徐々についていく筋力という結果に文句も言えなかった。

そして素振り数種類を陽が昇り切る前にできるようになった八歳のある日。

父が俺に庭へ来るように言った。

「これから教えることは太刀を振るううえで最も大切な技であり生き抜くすべだ。お前はなんのために戦うのか、これからも鍛錬を重ねながら考えるといい。」

そう言って父は俺に太刀の真髄である鬼刃斬りを見せ、錬気のことや気迫の重要性を教え、それからたまに俺を狩りに同行させるようになった。

錬気は戦う理由を明確に持っていないと刃には宿らず、したがって気刃斬りもできないと父は言った。

そのはずだった。

その日父が何を狩るために狩場に出ていたかはもはや覚えていない。

ただこれまで何度か見てきた中でも一番静かな日だった。

静かすぎて不気味だ、と当時の俺ですら感じたほどで、父は険しい顔で辺りの様子を窺っていた。

「やはりおかしい……小型モンスターすら見当たらない……」そう父が言ったその時だった。

リオレウスの咆哮、いや悲鳴が遠くから轟いてきた。

走り出した父を追う。

そうしてたどり着いた先には鮮やかな血と一層赤い甲殻、それらを貪る赤黒く肥大した蜥蜴のような生き物なのかも怪しい怪物がいた。

「恐暴竜……しかも暴走状態じゃないか……」

そう言ってチラリとこちらを見た父が今までにない悲壮な決意のこもった表情で太刀を抜いてからその先、暫くの記憶が俺にはない。

気が付けば足元には苦悶の表情を浮かべて焼き切られたように上半身だけになった父だったモノと折れた鉄刀、それから蜥蜴の化け物の死体が転がっていて、俺の手には直視できないほどの眩しい黄色の光を放つ父の形見の鬼斬破刀が血まみれの状態で握られていた。

「帰ろ……」

そう言った俺は簡単に持ち上げられる程に小さくなってしまった父の遺体を運んで重い体を引き摺って村に帰った俺を待っていたのは泣き崩れる母、そして心無い言葉だった。

夫を愛し、夫に愛されていた母にとって、その夫が上半身だけになって帰ってきた事は耐え難い事だったようで、ことの成り行きを説明した俺に母は「なんでそれなら最初からそうしてくれなかったの……あの人を返して……」と泣き崩れるばかりだった。

父を見捨てた薄情者。それが当時の俺の肩書きで、俺があれほどまで忌み嫌っていた「悪」に俺自身が身を堕としていたのは皮肉な事だった。

噂が広まるのは早いもので明くる日にはもう村中にことの経緯が知れ渡っていた。

家の外に出れば同情混じりの目で後ろ指を指される。

家に帰れば悲嘆にくれる母に罵られる。

小さい村にしては大きめの家には何を書いてるか読みたくもないような落書きがされ、窓は投げられる石で全て粉々となった。

この村に俺の居場所なんてどこにもない。幼いながらに俺はそう思った。

だから俺は村を出ることにした。

父の形見の鬼斬破刀、それから何着かの服と、父のボックスに入っていたいくつかの物資を袋に詰める。

「行ってきます」

夜明け前の静けさのなか、最後の挨拶を誰にでもなく零す。

返事も期待していなかったそれに、しかし返ってきたのは魘される母のうわ言。

「あなた……×……行かないで……」

父ともう思い出せもしない俺の名前を呼ぶ母の声に後ろ髪を引かれる。それでもここはもう自分の居る場所じゃないんだ、と決意を改めて1歩踏み出す。

さようなら、お母さん。

僕はお母さんのシチューが大好きだった。

溢れる涙が点々と来た道を示して、それが乾いて無くなった時にとうとう俺は帰る術を失った。

鬼斬破刀の雷の力で火花を散らして枯れ草に火をつける。

父から教わった知識で食べられる野草を見分けて煮込んで食べる。

焚き火で追い払えない大型モンスターは太刀で軽く傷をつけて追い払う。
それでも逃げない相手は討伐する。

モンスターを討伐すると近くを通る移動商会に売ることで物々交換をして貰えた。
母を悲しませたモンスターをに対する復讐も兼ねた戦いは徐々に討伐する割合の方が多くなって行った。
瀕死で逃げるモンスターに追いすがってとどめを刺すこともあった。
憎悪が錬気を、俺を強くしていった。

商会で補充しきれない物資は点在する街や国で補充していく。
そうしてまた目的のない旅に出る。
そんな日々が何年も続いたある日の事だった。

「そこの旅の方、アナタ相当血を浴びて生きてきていますよね?そんなアナタを見込んでお願いがございます。」
その後の人生を大きく変える分岐点が唐突に目の前に現れたのだった。

感傷・弐

「そこの旅の方、アナタこれまでに相当血を浴びていますよね？そんなアナタを見込んでお願いがございます。」

黒い外套にすっぽりと身を包み、同じく黒いハットを被った男が妖しげに金縁の丸眼鏡を煌めかせながらそんな言葉を俺に投げかける。

旅の途中で誰かに話しかけられることなどほとんどなかった俺は振り返った。

「ワタシはこの帝国のハンターズギルドの人事担当者でゴザイマス……以後お見知り置きを」

「冷やかしに用はない。さっさと消えろ。」

「いえいえ、冷やかしなどではゴザイマセン。言ったでしょう？お願いがございます、と。」

少しの間を破ったのは俺の方だった。

「用件を話せ」

「それでこそワタシが見込んだお方でゴザイマス……」

「御託はいい。何の用だ。」

「アナタにこの帝国を支える〝ハンター〟となっていただきたいのです。勿論報酬も弾みます……元々そういった生活をされていたのですからそう変わらない、そうでしょう？」

こちらを見透かすような発言に薄ら寒いものを感じる。

「お前はどこまで……」知っている、と続けた発言は曖昧模糊な発言に遮られた。

「今やヒトの生息圏の拡大はとどまることを知らず、海に船でこぎ出すのに飽きれば空へと進出しました。そして空を観測気球が網羅したのはそう最近のことではゴザイマセン。

ああ、そういえばこれは全く関係ことでゴザイマスが、最近この近辺で行き会ったモンスターを無差別に鏖（みなごろし）にしている密猟者が出没しているようでして、国としては手段を問わず無力化をするよう働きかけているようでゴザイマス……私個人の意見と致しましてはあのような活きのいい方こそ味方についてもらうべきだと」

「もういい、わかった。」

事実上の監視宣言に対して誘いを受け入れざるを得なかった俺を見て男は満足そう

に二、三度頷いてから「それでは集会場でお待ちしております。我らが同胞……」と言って歩き去った。

俺はため息を一つ落として、国内地図を頼りに集会場へと歩き出した。

集会場に着くと先程の男が待っていて、すぐさま俺をハンター登録する手続きを始めた。

名前ももはや思い出せない上にこの国の国民ですらない俺の事をスムーズ過ぎるほどにハンター登録する様に俺は内心舌を巻いていた。

ずっと分かっていたことではあったがやはりただものでは無い。警戒心を強く持った俺を他所に手続きは終了し、俺は解放された。

国に準備された家のベッドに体を沈みこませる。

柔らかいベッドで眠るのはいつぶりだろうか、そんなことを考えていると瞼が重くなり、俺は意識を手放した。

それからの日々は実の所文字通り親の仇であるモンスターを依頼に応じて狩(殺す)るという点においてはこれまでとそう変わりばえしなかった。
ただ、モンスターの素材と別で報酬金が得られるようになったことで身を守るための防具を手に入れられるようになった。
また、ちゃんとした食事も取れるようになったことで体に筋肉がしっかりと付くようになり、それに伴って実力も村を出た頃と比べ物にならないほどに上がっていた。
俺が正式にハンターとして活動し始めて1年が経つ頃には全てのハンターの頂点に立つというG級ハンターとなっていた。
その間あのスカウトの男は現れず、その事も忘れかけていた。
そんな日のこと。

「お久しぶりでゴザイマス。アナタの活躍はワタシの耳にもしっかりと届いております。」
「何の用だ。」
「いえ、アナタにまた〝お願いごと〟がございまして。詳しくは裏でお話致します。」

「つまり、俺に裏で〝ゴミ処理〟をする汚れ仕事をして欲しいと。」
「ええ、我が国のハンターは他国とは少し事情が異なりまして、ギルドも帝国が運営している形態を取っております。
　ですのでハンターなど国の警察組織だけでは手に負えない案件も多く、そこで我々が構想している『ギルドナイト』制度のテストケースになっていただきたい、そう思っております」
「拒否権は？」
「今回に関してワタシから特に無理強いをするつもりはございません。何せ汚れ仕事の依頼でございますから、強制した方があとのことが怖いというものです。しっかりと考えてから決断なさることをお勧め致します。ただ、」
　厭に丁重な扱いに嫌な気配を感じる俺に男は言葉を紡ぎ続ける。

「アナタにもしも、辛い過去があるのでしたら、同じ境遇の方を減らす一助になることは可能かと思われますとだけワタシからは申し上げておこうと思います。」
　その一言は俺の肚の中に眠っていた感情を呼び起こすのに十分だった。
　父を見捨てたと俺に後ろ指を指して石を投げ、母を弱らせた彼らは悪人と認定するのに足るように俺の中では思えた。

そうだ、俺は正義に憧れていたんだ。
それなら汚れたこの身がいくら汚れようとも、もう手遅れだろうと考えた俺は、男の誘いに乗ることにした。

男は常から浮かべている薄笑いをさらに深めて、上機嫌そうに二度、三度頷いた。
「でしたらアナタに紹介しておかなければならない方がいます。入ってきてください。」
その呼び声に応えてドアが開き、部屋に金色のスーツを身にまとった男が入ってくる。
「ギルドナイトテストケースＮｏ―２だ。」
そう名乗って短く刈り上げた頭を軽く下げ、上がってきた色眼鏡の奥からは鋭い眼光が覗いていた。

あまりの気迫に思わず刀に手をかけた俺を制止してハンターズギルドの男が相も変わらず胡散臭い口調で話す。
「これからアナタ方には当面の間２人組のギルドナイトとして活動して頂く事になります。これ以降お２人がギルドナイトとして活動する際には本名では何かと不都合があ

るかと思われますので、テストケースＮｏ．１のアナタには『アルファ』、それからＮｏ．２のアナタには『ベータ』として活動して頂きます。異存はありませんね？」

「ちょっと待てよ！いきなり見ず知らずの奴と勝手に組ませるなんて」

「ガタガタうるせぇぞ、坊主」

抗議の声は目の前の男のひと睨みとドスの効いた声で踏み潰される。

「一旦は通常のハンターとして狩りに出て頂いて連携などを確かめていただくのが良いかと思われますので、それでは頑張ってくださいね」

相変わらず気味の悪い薄ら笑いと共に俺を送り出した男の声と共に、Ｎｏ．２こと ベータは俺を半ば引きずるようにして共に部屋から退出したのであった。

感傷・参

「今はアイツの言うことに従ってろ。悪いようにはしねぇ。間違っても余計なことは言うなよ。」
俺を集会所から離れた裏路地に引きずり込んだベータは一方的にそう言うと、その場をすぐに立ち去った。
俺もすぐ後に路地から表通りに出るが既にベータの姿はなかった。

数日後、再び招集がかかって集会所のさらに奥にある部屋に入ると既に二人の姿があった。
「お久しぶりでゴザイマス。緊張、されていマスカ？」
実のところ招集の手紙が届けられた時から食欲が減退していた俺は何度目かの見透かされたような不気味さに身を震わせた。

そんなやり取りに不機嫌そうに舌打ちをしてベータが口を開く。
「それより今日の仕事の説明をしろよ。」
「今日はお二方の連携強化を図るべくモンスター討伐をお願いしたいと思っております。」
恐れていた時が今日ではないと分かり、内心で胸をなでおろす。
「しかし、通常のモンスターでは束になってもアナタ方にとっては問題にもならないでしょう。そこで」
そこまで言った男はいつも通りの外套を翻して何やら印刷された紙を俺とベータに一枚ずつ渡した。
そこには見たこともないモンスターのイラストと、依頼文と思しき文章が記されていた。
「今回アナタ方に依頼したいのは、霞龍オオナズチの討伐です。」
「いきなり古龍か、結構なことだな。」
吐き捨てるよう言ったベータの言葉にハッとする。

古龍種、それは通常のモンスターたちが織りなす生態系を超越した存在であり、人智を超えた能力を振りかざす生物であると、昔父がつけてくれた座学演習で教わってい

た。
　その時の記憶をなぞってオオナズチの情報を整理する。
「霞龍オオナズチは口から生成した霧と保護色に紛れて攻撃してくる古龍、パワーは他の古龍に劣るがその特性と他のモンスターのそれよりも強力な毒は命の危険があり、強いというよりは厄介なタイプ……であってたか？」
　それを聞いた外套の男が息を呑む。
「まあいい、要するにその陰湿蜥蜴のタマを取ってくりゃいいんだろ？ほら行くぞ」
　そう言ってベータはまたも俺の首根っこをつかんで引きずっていく。
　今度はそのまま荷車に載せられる。
「何しやがる！」
　ついに我慢ならなくなった俺はベータに怒鳴ったがベータはどこ吹く風といった様子でアプトノスの上から「どうした坊主？」と軽くこちらを見やって問うてきた。
「毎度毎度俺の事を荷物みたいに扱うんじゃねぇ！」
　怒気を込めた俺の言葉にベータはしかし、笑みを深めた。

「なあ、お前人を殺したことはあるか？」
「何言ってんだ俺は」
「他人の腹アカッ捌いて臓物引きずり出したことはあるか？手にまとわり付いた血が冷えて固まっていく感触を知ってるか？
この仕事（ギルドナイト）は、そういう仕事だ。それも出来ねぇやつはお荷物以外の何物でもない。ちったぁ身の程を弁えろ」
な？と静かに窘めるように語るベータの微笑の中でギラついている双眸に遮られて紡げない。
俺が何も言わないと見るとベータは再び手網を握り直し、正面を向いた。

俺だってやれる、その虚勢すら許されない相方への畏怖や、何者なのかという疑問やらが混ぜこぜになって俺は訳が分からなくなって、硬い荷車の床に横になってふて寝をした。

感傷・肆

じわり、と嫌な感じがして目が覚める。
荷車の中まで白いモヤが立ち込めている。
「霧……？」
「ああ、もっと正確に言うなら霞、だな。」
ベータの言葉が指すこと、つまり――――「もうここは奴さんのテリトリーって訳だ。坊主、古龍と戦うのは初めてか？」
「嗚呼。」
「そうか。兎も角あまり勝手に動くんじゃねぇぞ。はぐれたら合流出来ないと思え。さて、行こうか。」
「応。」

そろり、そろりと二人背中合わせで一歩ずつ進んでいく。
その時だった。

ヌルっとした「何か」が背中を這って、腰に提げたポーチの蓋がひとりでに開いて、携帯食料が吸い込まれるように消えていく。

「……は？」

「出やがったな。」

気の抜けた声しか出せない俺と対照的にベータは銃を抜いて携帯食料が消えた方に向ける。

それと同時に幕が？がれたように虚空から紫色の奇怪な龍が現れて、大きな目玉をぎょろりとこちらに向けてから再度霧の中に融けていった。

「なんだよあれ……」

「オオナズチは透明化するって予習は完璧だったんじゃねぇのかよ」

独り言ちた俺にベータが皮肉る。

「いや、霞込みであんなに分からないとは思わなくてさ。」

「まあお利口なだけじゃやってけねぇよなぁ。で？太刀使い特有の気配読みはどうしたよ。」

「は？」
「気が使えるような奴は敵の動きとかある程度わかるもんだろ？俺も昔太刀をかじってたがその時に教わってた奴はそう言ってたぞ。」
「嗚呼、そうなのか。」
「なんだ知らなかったのかよ。お前に太刀（けん）を教えた奴は相当ボンクラだったらしいな。」
　ベータが変わらない様子で吐いたその言葉に瞬時に頭に血が上って胸ぐらをつかむ。
「取り消せ。俺の親父を馬鹿にすんな。」
「取り消さねぇ。大体テメェみてぇなガキ狩場に放り出してる奴が碌な親なわけねェだろ。」
　語気と眼光を強めて言い放ったベータに腕を振りかぶる。

　一歩下がって身を躱したベータは鬼ヶ島を構えて宣う。
「おいおい、目ぇ覚ませよ。今闘うべきなのは俺とじゃねぇだろ？」
「うるせぇ！なら今言ったことを取り消せよ！」
　そう言った俺にベータが深くため息をついた。
　俺は更にこぶしを握って殴りかかる。
　しかしそれは当たらない。

「お前、そんなんでよく今まで生きてられたな……」
「安い挑発してる暇があるならちょっとは反撃してきたらどうだ！だいたいずっと偉そうにしやがって、何様のつもりなんだよ！」
その言葉にもベータは頭を掻くばかりで具体的な返事はない。
「何とか言えよ！」
業を煮やして振るった拳はとうとうベータの鼻先を捉えた。
ベータがふらりと数歩よろめいてから大きな舌打ちをする。
やってやった。そんな達成感にも似た何かはしかし数秒で霧散する。

「もうそろそろいい頃合いか。霧も深くなってきやがったしな。」
そう言ってベータは銃を俺に向けて構えなおした。
顔から血の気が引いていくのが分かる。
「ガキの守なんてめんどくせぇ事やってれねぇわ。よくやった方だろ。さっさと済ませて帰った方が得策に決まってらぁ。」
そう言って二度、三度首をポキポキと鳴らしたベータはスコープを覗く。

辺りがほとんど見えない深い霧の中で乾いた銃声が一つ、鳴り響いた。

感傷・伍

破裂音に思わず目を瞑る。
しかし予想に反して激痛はいつまでたっても訪れない。
更に背後から怯むような嘶き声がして、同時に鼻を衝くような刺激臭が漂い始める。

「は……？」
「ペイント弾だよ。気配が読めないんならこれ使うしかねぇだろうが。」
「ならさっきのは何だったんだよ。」
「オオナズチは古龍の中でもかなり知能が高い。だから油断を誘うために一芝居打った。」
逃げるように山の上へ飛び去って行くオオナズチを見やりながら言うベータに再びふつふつと怒りがこみあげてくる。
「それでも親父のことは」言いかけた俺に被せるようにベータが言う。
「ああ、その件については悪かった。」
思いのほか素直に謝罪したベータにたじろぐ。

「俺にも親父がいる。血は繋がっていないし色んな奴が碌でもないと言うが自慢の親父だ。お前の親父のことを知りもしない俺が何か言うのはお門違いってもんだった。芝居とはいえ言い過ぎた。悪かった。」

俺は今抱えた感情の遣り場を見失って、何も言えなくなった。

マーキングが消える前に追いかけようぜ、そう言ったベータの後ろを警戒しながらついていく。

今度は不意を打たれないように、今度こそ反撃に出られるように。

刺激臭が強くなる。

すぐ近くに奴がいるという確信が強まる。

その時だった。

何もないところ、丁度ベータの死角から紫の霧が噴き出て、ベータの全身を?み込ん

だ。
「ベータ！」
思わず上げた声に、「来るな！」と苦し気な怒声が返ってくる。
毒霧が晴れた時、そこには血を吐いて倒れ伏すベータの姿があった。
たまらず駆け寄った俺に「ポーチの二番目に小さいポケットの中に青い瓶がある……それを出してくれ……」
言われたとおりにポーチを開けて小瓶を取り出してベータに渡す。
ベータは震える手でそれを握って、口元に近づけて中身を一息で飲み干した。
「アルファ、すまねぇ。下手打っちまった……後、任せていいか？」
「嗚呼。」

そう言って立ち上がり、太刀の柄を握りなおす。
五里霧中、そんな言葉が似合う景色の中に溶け込んだオオナズチの気配を探る。

さっきベータと喧嘩したときに思い出した。
はるか遠いところに感じる生前の親父は「なんのために太刀を握るのかを考えろ」と言っていた。

もし今この得物を振るうことに理由が必要なら、俺はあのいけ好かない銃手を助けるためにこの太刀を握る。親父、俺に力を貸してくれ。

「ここだ」という直感に従って刃を振るう。

キィンと甲高い音と共に振るわれた刃に人のそれよりも少し黒く濁った血飛沫が載り、更に刃に霧に溶け込むような白い光が宿る。

一瞬遅れてオオナズチの悲鳴が上がる。

同時に驚きのあまり透明化を維持できなくなったか、眼前にオオナズチが姿を現す。

その長い首には一筋の長い太刀傷がついており、ここにきて初めて大きな目玉でこちらを睨み、敵意を露わにしていた。

更に地を震わせるほどの大きな咆哮を上げる。

体が思わず震える。初めて体感した純粋な殺気に対する恐怖を、口角を上げて押し殺す。

虚勢に乗って気が昂る。

「やっとお互い殺る気になったってわけだ……」

老獪な古龍と意気軒昂な若人が正面からぶつかろうとしていた。

感傷・陸

睨み合いが続く。
霧の中、オオナズチの出方を探る。

ペイント弾のおかげで大まかな位置は分かるが、今どのような態勢でこちらを観察しているのか、あるいは今にも打って出ようとしているのかが分からなかった。
その時、ふわりと風が起きた。
攻撃の予兆に後ろに一歩飛び退いて回避すると、先程まで自分がいたところに土煙が舞い、見えない何かに押しつぶされたように小ぶりなクレーターのようなものが作られる。

死神の鎌が首筋をなぞったような感覚に思わず再び身震いをする。
再度風が起きる。
また同じ攻撃。
今度こそ仕留めるつもりか。

ならばと俺は刀を納め、今度は半歩身を引く。
そこから踏み込んで一閃。
恐怖はない。気の盾が攻撃を逸らしてくれると、理解ではなく感覚がそう言っていた。

再度鯉口から甲高い音が鳴り響く。
数舜遅れて三つの斬撃が走る。
手元の刀身の白い光が更に濃くなる。

悲鳴が上がり、紫色の鱗があらわになる。
そうしてオオナズチは向き直って首を、全身を前後に揺らしながら一歩、二歩、ゆらゆらと俺との間合いを図る。
口が小さく開く。
また道具を盗むつもりか。
そう思った直後、大きく開いた口から飛び出た長い舌が高速で唸りを上げて振るわれて、俺の体をしたたかに打ち付けた。

最初に道具を奪うところからフェイクで、本命はこの攻撃だったのか。
俺は受け身を取りながら歯噛みをする。
衝撃のせいで揺れる世界を振り払って、太刀の柄に手をかけなおす。
向こうの姿が見えている間に、今度はこちらからだ。
左足で踏み込む。
ズドン、と重い音がして視界がぶれる。
その中央に捉えたオオナズチを斜めに切り払った。
つもりだったがしかし、オオナズチはここまで見せたことのない俊敏な動きでそれを紙一重で回避し、翼をはためかせて強風を起こして俺を吹き飛ばす。

それに合わせて空中で体勢を立て直して再び切りかかる。
狙うは翼。
反撃の風圧を防ぐための布石は見事に成功し、右翼が切り裂かれて勢いよく鮮血が噴き出す。
さらに連続して剣戟を続けるうちに刃には黄色い閃光が宿り、霧も払われていく。
霧に身を隠せなくなったオオナズチは頭を上げ、再度霧を吐き出そうとした、その時

だった。
ズドン、と鈍い銃声が鳴り響いて、オオナズチの右の目玉が弾ける。
翼の傷のせいで逃げられないオオナズチは、不意のことに対応しきれずにのけぞるばかり。

その好機を見逃さず俺はオオナズチの左の目玉に対して太刀を振り抜く。
そうして返す刀で光を失ったオオナズチの首を断ち切る。

ゴロン、と無残な肉塊と化した頭が地に落ちて、胴体は大量の血を噴き出しながら倒れた。

やりきった、という達成感と疲労感が同時に襲い掛かってきて、俺は血の匂いが染み込んだ草原の上に倒れ伏した。
「おう、よくやったな小僧。」
見た目の上ではそうでもないが、満身創痍に変わりはないベータが体を引きずってこっちに来て、俺の隣に転がって言う。
「ひでぇ様子だな、おっさん。」

「うるせぇ、俺はこれでも２０代だぞ。それに自分のこと見て見ろよ。テメェの方がよっぽど重傷だ。」
「それもそうか。」
　どちらからでもなく、笑い声が漏れる。
「これでクエスト達成か？」
「あれが生きてるように見えるならもうひと頑張りしなきゃなんねぇがな。」
「にしても、最後にいいとこだけ持っていきやがったな。」
「テメェが不甲斐ねぇからだろ？虎の子の滅龍弾使わせやがって。高ぇんだぞ？あれ」
「まあ俺には関係ねぇからいいか。」
「んだとテメェ、帰ったら殴り飛ばしてやるからな。」
「そういうことは帰還信号打ってから言おうな、オジサン？」
「調子に乗りやがって……」
　ベータが悔しそうにうなったのを最後に沈黙が訪れる。

「あのさ、悪かったよ。何も考えずに胸ぐら掴んでぶん殴ってよ。」
「いんや、気にしてねぇよ。」
「そうかよ。あ、撤収用の飛行船が来たらしいな。やっと帰れる。」

「早く帰ってシャワー浴びてぇな。」
「そんじゃ、行くか。」
そう言って二人は再び立ち上がり、タラップを伝って飛行船に乗り込んだ。

感傷・漆

オオナズチの狩猟後の処理は殊の外すんなりと済んだ。
それこそこれまでの通常モンスターと大差ない程度の手続きのみで片付いた。
そして今現在。
「甘ぇよ！」
「クソ、また負けた！」
ベータの木刀が俺の脇腹を打ち付けた。
それからこの国で一人で過ごしていた俺の生活にベータが入り込むようになった。
ベータは狩場で言っていた通り太刀の心得があったようで、更に太刀の型を幾つか教えてもらって、気の使い方を教えてもらった。
それでもベータには勝てない。
「その戦い方は親父さんの真似か？」
「あぁ、まあ見てたのが昔過ぎて半分我流だけどな。」
「お前の親父さんはずいぶんお利口さんな戦い方をしてたらしいな。まあ並のモンスターならそれで勝てるしいい剣士だったんだろうが、この前のアレみたいに面倒な手合

いには通じないことが多い。」
「それならどうすんだ?」
「こうすんだよ。」
そう言ってベータは俺の鳩尾を手加減して殴りつけた。
思わずうずくまって嗚咽する俺にベータが上から声をかける。
「この前のオオナズチのような古龍種も含めて動物はすべからく不意打ち、意識の外からの攻撃に弱いもんだ。だから、武器で攻撃を続けても埒が明かない時は〝こう言う手段〟を取る。」
「なるほど、こういう事か。」
そう言って殴りかかった俺の右拳を掴んでベータが放り投げる。
「素直なのはいいことだが、愚直なのは頂けねぇな。もっと工夫しような?」
そう言われて何も言い返せずに床に臥す俺にベータは手を差し出した。
「いつか絶対勝ってやるからな……」
「やれるもんならやってみな?ベータはニヒルな笑みを浮かべてそう言った。

そんな穏やかな日々が続いたある日のこと。
伝書フクズクが俺の部屋の窓辺に赤い手紙を置いていった。
赤は血の色、つまり対人任務の招集状であった。

「ついに来たか……」
ベッドから起き上がって呟く。しんとした部屋に俺の声が響く。
朝食は喉を通らず、空腹を堪えて集会所の裏の部屋へ入る。
そこにはいつも通りの様子の黒外套の男一人しかいなかった。

「今日はお早いですね。感心なことでゴザイマス。」
「ベータはまだなのか。珍しいな。」
「いえ、今回はアルファ様へのご依頼となりますので、ベータ様はお呼びしてオリマセン。」
「そうか、それで任務の内容を聞こうか。」
「かしこまりました。」

そう言って男が一枚の写真を差し出す。
受け取って確認すると、そこには、ユクモ風の羽織を身に着けた、老齢の男性が写っていた。

「その男は薬物取引や違法賭博等で裏組織である『鬼龍會』を一代で我が国の指定要注意団体に登録されるまでの大組織に育て上げた初代総長、リュウガです。先日亡くなりましたが。」
「死んだのか。」
「ええ。数か月前のことでした。その後釜に腰を据えたのが我々でも未だに情報をつかめていない謎の男です。ここではXとしましょう。」
男は読み上げるかのようにすらすらと話す。

「我々が集めた情報ではXは先代よりも好戦的で、手段を択ばず組のテリトリーを更に広げようという野望のもと、スラム地域を中心に我が国において広い地域を牛耳るまでに成長しています。」
「それで？」
答えが分かり切っている相槌を打つ。

「アルファ様には『鬼龍會』の壊滅をお願いしたい。」
「そうだろうと思ったが、俺一人でそれはさすがに無茶じゃないか？」
「心配はございません。入ってきてください。」
男が裏口の方へそう呼びかけると、扉が開いて、背中に双剣を携えた男が入ってきた。
「彼はギルドナイト〝スペア〟ケースＮｏ．１の『ガンマ』君です。ご挨拶を。」
そう促されたガンマは「ガンマだ。元々は特殊部隊に所属していた。荒事は慣れている。」
「彼には今回の任務で便宜上アルファ様の指揮下に入っていただきます。」
そう言った男の言葉はほぼ頭に入ってはこなかった。

感傷・捌

「三日後に『鬼龍會』の幹部会合があるという調べがついておりますので、アルファ様にはそこを叩いていただきたいのです。」
まるでピクニックの予定でも話すように気軽に言われたその計画と支給された拳銃をおっかなびっくり受け取った若い男――
アルファがガンマを伴って部屋を出たと同時にワタシはニヤリと口角を上げた。

『ギルドナイト計画』
それは僻地に存在するシュノイ皇国における極秘の計画である。
小さな皇国である我が国の軍事力は列強と呼ばれる国々に比べて低すぎる。
その上モンスターの襲来などもあるこの世界では治安維持のために避ける人手は驚くほどに低い。
加えて我が国は外部との交流を殆ど完全にと言っていいほどに絶っていることもあって、他国が加盟しているハンターズギルドにも属していないこともあって、治安が

悪い。
そこで考案されたのが、「毒を以て毒を制す」ギルドナイト計画であった。
まず、交渉役のワタシが、問題視されている且つ話が分かる犯罪者等に声をかけ、ギルドナイトにスカウトする。
そうして必要に応じて実力をつけさせてから別の犯罪者を壊滅させる。
ギルドナイトに任命された者もいつかは斃れるだろうが、そこは国土の一割がスラム街になるほどの我が国、替えはいくらでも利く。
こうして犯罪者を減らしていけば治安維持にもなるというのがこの計画の全貌であった。
「にしても、『鬼龍會』総長ですか……初任務が随分と重くなったものです……色んな意味で。」
そう独り言ちて私はここからの計画を思ってため息を一つ零した。

「はぁ……」

時を同じくしてアルファは自室でため息をついていた。

（この前守るために太刀を振るって決めたのにな……）

手の中で弄る拳銃は実際以上に重く感じ、命を奪う威力のようなものを感じる。

任務用にと支給された制服は赤い。返り血を浴びることを前提にしたようなカラーリングにさらに気が滅入る。

そこにコンコン、とノックの音が響いた。ドアを開けると先程別れたはずのガンマの姿があった。

「失礼。」彼はそう言いながら有無も言わさない様子で部屋にするりと入り込む。その身のこなしは特殊部隊に所属していたというのも納得であった。

「お、おいなんだよここは俺の家だぞ。」

「ああ、知っている。君が人を殺すことに未だ忌避感を持っていることも。」

「いきなり君呼ばわりかよ」

「戦場では実力が物を言う。君は僕より力は強いだろうけど君は僕に勝てない。だから君と呼ぶ。」

小生意気なことを言いながら双眸を妖しく煌めかせるガンマに思わず身震いをする。

「今、ビビった？」
「ビビってねぇよ。」
「ビビったでしょ、震えたし。」
「ビビってねぇ！」
　そんな応酬を繰り返す。
　故郷の村を出てから同年代の相手と話したことがなかったからか、思いのほか会話は弾む。

「それで、何が怖いの？」
「別に……」
「手、ずっと震えてる。それに顔も青い。ちょうど殺される直前の人みたい。」
　縁起の悪い喩えをするガンマに思わず噴き出す。

「なんだよ人に向かって死にそうみてぇなこと言うんじゃねぇよ！」
「死にそうみたいじゃなくて死にそうなんだよ。」
「は？」

「そうやって仕方なく人を殺しに行く人、いっぱい見てきた。殆どの人は、帰ってこなかった。」

「それって……」

結果は聞かなくてもわかる。

「戦場は狩場とは違う。決意は先にしてから行かないと、殺せない。ねえアルファ、君は何のために人を殺すの？」

「それは……」

「特殊部隊の訓練では、こう教わる。『１００を救うために１０を殺せ。１０を守るために１を殺せ』って。僕はだから人を殺す。目の前の人が将来傷つけたり、殺すかもしれない人を守るためにどれだけ命乞いされても殺す。それが正しいって知ってるから。正しいならしてもいい事だから。」

アルファもそう思わない？――――そんな問いかけに俺は思わず首を縦に振ってしまった。

感傷・玖

明朝早くに俺とガンマを乗せた竜車は人知れず首都を発った。
行商人を装った黒外套の男の部下が竜車を操り、いくつかの関所を超えていく。
『鬼龍會』は北部地方にあるスラム街を拠点にしている、という言葉の通り竜車は北上していき、それに伴って吹き込む風が冷たくなっていく。
建物も薄汚いものが多くなり、半ば崩れそうなものも目に留まり始める。
ガンマはそんな光景を気にする様子もなく、竜車の壁に背中を預けて目を閉じる。
どうしていいかわからなくなった俺は、それを真似て同じように目を閉じた。
竜車の振動に誘われて、俺の意識は微睡の中に落ちていった。

冷えた空気の中で目を瞑った僕は薄く目を開けて今回のターゲットの一人であるアルファの様子を伺う。

僕と同じように壁にもたれて目を閉じた彼は昨日は随分動揺していたが、今朝からはいやに落ち着いていた。
若くしてこの国の特殊部隊の一分隊を任された僕は色々な人間を見てきたからこそ、その様子は余りに不気味であった。
こういった手合いは二つに一つ。
何も考えていない愚物か、覚悟を決めて理性の箍が外れた狂人か。
前者であれば容易に「処理」することができる。しかし後者であった場合は面倒だ。
あるいは昨日の「声掛け」が上手くいき過ぎたか。
そんな可能性を考えて僕は内心で嘆息する。
当然のように僕は眠ることなく、ポケットの中の拳銃を弄びながら到着を待っていた。

肩を叩かれて覚醒した意識に「到着したよ」と声がかけられる。
「わかった。」
俺は神妙な顔をして立ち上がった。

竜車を出るとそこは放棄されてから相当な時間が経っていそうな屋敷だった。
窓は割れたうえで板が目張りされており、中の様子は確認できない。
また、どこか仄暗い雰囲気が漂っていて、まるで俺たちを含めた部外者が入るのを拒んでいるかのようであった。
「いやな感じだ。」
俺の言葉にガンマは相槌を打つ。
「うん、でも新しい足跡がある。この辺の地方では珍しい革靴だね。ここで間違いはないみたいだよ。ああ、知ってそうな人がいるから話を聞いてみよう。」
そういって指さした先――――浮浪者の男がうろついている方――――へとガンマは歩き出す。
そして自然な流れで男に話しかけて、そのまま双剣を抜いて喉笛を切り裂いた。
「おい！何してんだ！」
思わず声を上げて駆け寄った俺にガンマは平然とした様子で男の胸を一突きして完全に絶命させてから「こいつの懐を探ってみろ」と言った。
言われた通り探ろうとした俺は男の右手に握られた拳銃を見て愕然とした。
「これは……」

「拳銃なんてもの、そもそも市場すら”ない”のだからどこだろうと流通しようがないんだ。それをカタギの、しかもこんな身なりの奴が持っているわけがない。変装したやつらの見張りだよ。」

そう吐き捨てて、急速に熱を失っていく血だまりに目もくれずにガンマは双剣の血を拭って鞘に納めて入口へと歩き出す。

俺は余りに濃い鉄臭い匂いにむせ返りながらもその背中を追って走った。

暗い通路の灰色の壁に赤黒い血飛沫が跳ねる。

何度目かも忘れた、焼き回しのような光景に慣れつつある自分に怖気がする。

血だまりを踏まないように死体を跨いで通路を進む。人間がいたら戦闘になる前にガンマが全員殺して進む。

その繰り返しを数えるのをあきらめたころだった。

これまでのものと違う重厚な扉に行き当たる。

開けてみると、地下へと続く階段が現れた。

思わず顔を見合わせてから、どちらからともなく下り始める。
階段を降り切った先にある先ほど同様の重厚な扉をガンマが押した。
地下室らしく一層暗いその部屋に一歩踏み入ると、何やら柔らかいものを叩くような声とうめき声が聞こえてきた。
「ったく強情だなぁ、さっさと吐けば楽に殺してやるのに」
聞こえてきたそんな言葉に俺は表情をこわばらせた。
そして闇に目が慣れてきて、人の群れの中心で縛り付けられている男の、やつれた顔を見た瞬間に俺の世界はスローモーションになっていた。
「ベータ!!!」
そう叫んで走りだした俺をガンマが追いかける。
「あのバカ……」
その姿を確認した男たちは一斉に銃を抜いて、ほぼ同時に引き金を引いた。
それに対応して俺も太刀を鞘から抜きはらう。
数え切れないほどの鉛玉が殺到し、それら全てが吹き飛ばされた。

感傷・拾

屋内だというのに嵐の中かと思うほどの暴風が吹き荒れた。
俺に向かって放たれた弾丸はすべて乱気流に巻き込まれ、当初の目的を果たせずに壁に虚ろな弾痕を残すのみであった。

そうして本来有り得ない現象とともに抜き放たれた刃は本来の白銀の上に、碧い光を薄く纏っていた。

風が収まり、ベータを囲む男たちの方へ切っ先を向ける。
それと同時に怯んでいたリーダー格の男も立ち直る。
「やれぇ!」
号令をかけたと同時に男が音もなく胸から血を噴き出して崩れ落ちる。
「僕、正面戦闘は苦手なんだけど。」
硝煙を吐き出す拳銃を構えてガンマがそう言った。

「じゃあ一生そこにいな！」
ぼろぼろのベータを見て頭にきている俺はそう言って男たちの中に飛び込んだ。
匕首（ドス）を構えた男を半身で躱してわき腹に蹴りを入れて吹き飛ばす。
次に腰に下げた太刀の鞘の先端を、背後に回っていた男のちょうど股間に叩きこむ。
うずくまった男がかろうじて構えた拳銃を太刀の峰で払い、返す刀でさらに奥の男の首に峰打ちを叩きこむ。

その間にガンマが何発かの銃弾を放って淡々と男たちを葬っていき、すぐに部屋には硝煙が充満した。
部屋にいる男を全滅させて、ドアを蹴破るようにやってきた増援を何度も平らげて、厭に鋭敏になった感覚が建物の中に自分たち以外に誰もいなくなったことを伝えてきたところでようやくか、と太刀を鞘に納める。

急いで駆け寄ってベータの拘束を解いたその時だった。
チリリ、と焦げるような殺気を感じて後ろに飛びのく。

「何のつもりだ？」

首を曲げて俺と同じく不意の攻撃を躱したベータが襲撃者――――――ガンマに問いかける。

「簡単な話だよ。僕とアルファでは任務が違ったってだけ。最近随分精力的に訓練してたらしいね？もしかして二人で共謀してクーデターとか、計画してたりしない？」

「何を言ってんだ、ガンマ」

「ああ、いいんだ別に。２人で当たった『鬼龍會』討伐作戦だったが、思いのほか多かった敵勢力の前に１人がはかない犠牲になってしまった。しかも偶然その場に居合わせたために巻き込まれたギルドナイトテストケースＮｏ．２までも命を落とした。でも仕方ないんだ、この国全体を救うための小さな犠牲なんだから。そう、仕方ないことだった。ああ、悲しいことだ。」

「てめぇ、いや国自体がはなからそういうハラだったってわけか……」

歯噛みしながら呟いたベータの言葉、しかしガンマはそれも否定する。

「いやぁ、むしろ想定外だったよ。お前ら二人がこうして生き残るなんてな……俺は戦闘終了後にどっちか一人を始末して終わりのつもりだったんだが。よく頑張ったよホ

ントに。おかげで手間が増えちまった……だからさ、おとなしく死んでくれよ。」
そう言ってガンマは引き金を引いた。
立ち昇った硝煙を払うようにベータがいつの間にか持っていた匕首で銃弾を弾いた。
「おいおいマジかよ……普通そんなチッセェ刀で銃弾弾くかよ～ありえねえよなぁ……」
どこかコミカルな動きで肩をすくめながらボヤいてみせたガンマにベータが問う。
「なあガンマ……いや違うな。てめえは誰だ？」
「誰って、私はガンマだよ？知ってるでしょ？」
「そうじゃねえ、てめえはさっき正面戦闘は苦手とかほざいてやがったのに今は俺たち二人相手に一人で勝つつもりだろ？それに私だの俺だの僕だの口調が変わりすぎて気味がわりいったらありゃしねえ、一体その体の中に何人いやがるんだ？」
その問いかけに対してガンマの様子が明らかに変わった。
「気づいちゃったんだ……ならなおさら死んでもらわないと、ね？」
そう言ってガンマは信じられない速度で引き金を引く。
タタタァン！

ほとんど一つに聞こえる銃声とともに三つの銃声が吐き出される。
幸い未だ鋭敏な感覚で瞬時に反応し、碧い刃でもって鉛玉を切り裂く。
ベータは脇に転がっているリーダー格の男の死体を盾にして防いでいる。

再度多数の銃弾が放たれる。
「死んでよ」
今度はすべて俺狙い。
全て弾き防ぐが、刃渡りの長い太刀では限界がある。

「おいベータ！何してんだ！早く加勢しろ！」
「悪い、待たせたな。」
そう言いつつも太刀を体の前に構えて目を閉じたままのベータに、「諦めたか！なら死ね！」とガンマが今までよりさらに多い銃弾を放つ。
同時にベータが「一刀、鏡花……」と独りごちた。
そうして開眼すると同時にありえない速度で太刀を振り抜き、全ての弾丸を弾き落とす。
そして構え直した刀身には、俺のそれと対照的な紅い光が宿っていた。

感傷・拾壱

ベータの握る太刀に宿った紅い光はそこだけにとどまらず、軌跡を描いて花弁のようにベータとガンマの間の空間に舞った。

少し遅れて、ガンマが倒れ伏す。

「安心しろ、峰打ちだ。」

俺を手で制して視線はガンマに向けたまま、ベータはそう言った。

「いや、あれ当たってたのか？」

俺の問いに、ベータはふうっと息を吐き出してから「練気でぶん殴っただけだ。お前もそのうちこのくらいできるようになる。」と何でもないように答えた。

俺は何も言えなくなって、ベータの方へ視線をやった。

眠っているかのような穏やかな顔に、先ほどまでの凶行の気配は感じられない。

「帰るか。」そう言ったベータに首肯すると、ベータはガンマを右肩に担いで歩き出した。

「そういやベータ、ヤクザだったんだな。」
無言の帰路が気まずくなったアルファはそんなことを聞いた。
「ヤクザじゃねえ、マフィアだ。」
「どっちでもいいけど何でそんなとこに入ってんだよ。」
そう訊いた瞬間だった。
ベータのこめかみに青筋が浮かび、その左腕が俺の胸ぐらをつかんだ。
「あそこは、鬼龍會は俺の唯一の居場所だ……いや、もう居場所だったって言った方がいいか。」
そう言ってベータは胸ぐらから手を離した。

そこで、俺とガンマが鬼龍會を壊滅させたことに思い当って、俺は何も言えなくなった。
「ああ、気にしなくていい、どうせあの奇人が裏で糸引いてんだ。元凶でもない餓鬼を責める程俺も堕ちてねえよ」

それからしばらくしてからベータは徐に話し出した。
「なあお前、スラム街ってどんなとこか知ってるか?」

「え？」
「夏は腐った食い物を食って、冬には自分が先から腐りだす。満腹なんて感覚をそもそも知らない人間があぶれて暴れる気力もなく死んでいく。そんな地獄を見たことがあるか？」
俺は想像もしたことのない状況に俺は絶句した。
「そんな中で親父は凍えてる俺に手を差し伸べてくれた。スラムの皆にあったけぇ飯を食わせてくれた。
スラム街を、鬼龍會を見て、知った上で悪くいうのは構わねぇ。俺たちはヒーローでも善人でもねぇ。ただ、聞いただけで実情を知らずに決めつけるのはこう……納得がいかねぇ。」
「悪かった……」
「まあ大人がガキ相手にムキになった時点で俺の負けだわな。詫びとしてこの後の処理は俺がやっておく。お前は帰ったら自分の家でいろ。それと、しばらくの間はその刀、肌身離さず持っておけ。」
それからベータは適当な竜車を捕まえてヒッチハイクして、俺を家まで送った。

ドサリ、と重いものが床に落ちる鈍い音が響く。
「こいつとアルファをウチにけしかけたのは、お前だな？」
「さて、なんの事でゴザイマショウ？」
「さしづめ鬼龍會（俺たち）が今内部抗争で不安定って情報を仕入れて今が好機と踏んでアホふたりに何も伝えずに差し向けたってところ。もっと言うならガンマはお前らお抱えの暗殺部隊出身の人間、だろ？」
そこまで一息で言ってのけたベータのさっきを受けて尚、男は薄笑いを浮かべている。
そのまま組んでいた腕を徐に解いて、パチ、パチ、パチと手を叩き始める。
「いやはやお見事、そこまでお見通しとは……さすがは鬼龍會総長様でゴザイマスね。」
「もう『元』総長だよ。テメェらのせいでな……」
「おや恐ろしい……」
殺気をより一層強めたベータに男はそう言ってのけた。
「適当なことばっか抜かしやがって……
まあいい、ともかく俺の要求はひとつ、俺に文句があるなら直接俺を殺しに来い。ガ

キ騙して差し向けるとか胸糞悪いことしてんじゃねえ、分かったな！」

最後には怒鳴るように男に言いつけてベータは足音荒く部屋を去った。

残された男は暗い部屋に舌打ちを一つ落として、今後の計画を再調整し始めるのであった。